「君が立石ののの花さん!?」
「あ、はいっ」
いきなり大きな声で呼ばれたから、出席の点呼みたいな返事になってしまった。
背が高くてがっしりした体格。やっぱりこの人、見覚えはない。
「おれは二年A組の福島想太。クッキング部の部長やってます」
クッキング？　見た目とかなりギャップがある。玉子よりラグビーボールとかの方が似合いそう。
ていうか、クッキング部の部長が何で私のところに？
尋ねるより早く、部長はずいっと顔を近づけた。
「頼む、フィリピンのスイーツのこと教えてくれない？」
思わず、風羽ちゃんと私は顔を見合わせた。
「うちのクッキング部、毎年十月に地域の公民館の縁日で一日カフェを出店してるんだ。今まではいつもパウンドケーキだったんだけど、今年は何かユニークなことしたいって思ってた。でもなかなかアイディアが出なくてさ。そしたらちょうど、立石さんが文化祭でフィリピンカフェを提案したっていうのをこのクラスの部員から聞いたんだ。何かすげー面白そうって思った」
Unbelievable！（信じられないんだけど！）
あのときは誰も投票しなかったフィリピンカフェだけど、おもしろそうって思ってくれる人もいたんだ……？
予鈴が鳴る。その音が、いつもより何だか弾んで聞こえた。
「やべ、教室戻んなきゃ。あ、うちの部活、今日活動日だから、気が向いたら放課後調理室に来て。クッキー焼いて待ってるから！」
最後に太い声で乙女のような一言を残し、部長は廊下を駆けていく。その背をぽかんと見送る私に、
「へー、うちのクッキング部そんなことやってたんだ。ノノ、放課後行くの？」
風羽ちゃんが訊いた。
今日は月曜だからジョシュア先生のレッスンはない。部活にも入っていない私はヒマ人だ。
行ってみたい。フィリピンのスイーツに興味を持ってくれた人たちと話をしてみたい。
その気持ちがぷつぷつと湧きあがるのを感じながら、私は口を開いた。
「ねえ風羽ちゃん、放課後空いてる？　よかったら一緒に行ってみない？」
仲直りした今なら、素直に誘える。
「いいよ。クッキー食べたいし」
風羽ちゃんがからっと笑った。